

学位を取得して

前 社会科学研究所 ^{ヤン}楊 ^{カン}剛

このほど「記・紀神話論と神道論の展開」と題する学位論文が認められて、学術博士号を取得し、大学院社会科学研究所（国際社会論専攻）を終了させていただくことができた。以下、私の研究生活をふりかえりつつ、学位論文で主として明らかにしたことを述べてみたい。

八十年代初頭、大学の2年か3年かの時、中国では日本古代史の研究が盛んになってきた。特に汪向荣氏の邪馬台国研究は学界の注目を浴び、日本古代史に対する私の興味を引き起こした。当時すでに『古事記』の漢訳本もあり、私はそれを読みながら天孫降臨と神武東征の神話が邪馬台国の所在と関係があるのではないかと考えた。古代中国人は距離と方向を非常に重視したから、倭人伝にみえる邪馬台国の距離と方向は間違いがないだろうが、前後年代の違う二つの「邪馬台国」、つまりまず九州にあり後に大和地方に移った「邪馬台国」を資料引用の間違いにより一つのものにしたのではないかと考え、仮説を発表したこともある。ところで近年吉野ヶ里など九州一帯の発掘が著しく進んでいるので、いったいどんな結論が出るか期待している。私が日本の古代史、特に『古事記』などの研究に関心を持つようになったきっかけはこの邪馬台国論争だった。

大学卒業後教員として北京大学の日本語科に残り、日本語と日本事情の授業を担当した。そして2年後の昭和59年、かつて北京大学で教鞭をとられた森本先生に呼ばれて来日、同年4月の総合科学部創立十周年記念の時に大学院地域研究科の修士課程に入学し、永尾章曹先生、朝倉尚先生について、日本語と日

本文化の勉強を始めた。本格的に『古事記』、『日本書紀』などを読み、修士論文では、記・紀の用字法を中心に、『古事記』の成立事情の一端を明らかにした。この修論執筆の過程で、神道への関心が高まり、折り好く博士課程（後期）ができたので、引き続き頼「祺」先生の指導の下で、神道論を中心に記・紀神話の研究を続けることとなった。修了論文は在来の神信仰と外来の思想理論との関係を検討し、神道論の展開及び日本の信仰文化の本質的な部分を究明しようと試みたものである。

複雑多様な日本文化と同じように、神道にも仏・道・儒教の影響があり、中近世以後の神道論は実に複雑多様であった。しかし、神道論は主に神信仰、特に『古事記』、『日本書紀』などの神話をもととするものであるから、いわゆる記・紀神話の研究は神道論研究に不可欠なものである。

記・紀神話の研究はいまも盛んに行われているが、本居宣長の『古事記伝』が現在もこの領域の基礎となっている。しかし、宣長があまりにも国粹的である故、その判断には偏りもかなり見られる。かれは『古事記』の神話に与えた中国思想の影響を強く否定した。例えば、かれは『古事記』には陰陽五行思想が存在していないと断言した。

ところが『古事記』の神界はほぼ天津神と国津神という二大系統によって成立しているし、神々が出生する時ほぼ偶数の形とするその記述の仕方は、明らかに陰陽思想の影響を受けていると考えられる。また、『古事記』の五穀起源説話とされるオホケツヒメ物語の記述には五行思想の相生相尅の原理が存在し

ていることも見逃せない。

『古事記』の記述によれば、イザナミという神が天地を創生するため神々を生んだ。そして火の神を生む時火傷を受けて亡くなる。この火の神を生む前と生んだ後の場面についての記述には五行思想の影響が見られる。イザナミはまず木の神のオホケツヒメ神を生み、そして火の神のヒノヤギハヤヲ神を生んでから、金の神のカナヤマビコとカナヤマビメ神、土の神のハニヤスビコ、ハニヤスビメ神、水の神のミツハノメ神、さらに木の神のワクムスビ神などを相次いで生み出したと記述してある。この神々の出生順はほぼ五行原理の「木生火、火生土、土生金、金生水、水生木」という相生の循環に従っていることが認められる。

さらに上述のオホケツヒメ神はワカヤマクヒ、ワカトシ、イモワカサナメなど土用をつかさどる神々、ミヅマキという冬をつかさどる神、ナツタカツヒ、ナツノメという夏をつかさどる神、アキビメという秋をつかさどる神、ククトシ、ククキワカムロツナネなど春をつかさどる神々を生み出した。この土用、冬、夏、秋、春をつかさどる神々の出生の順は五行の「土、水、火、金、木」すなわち「土尅水、水尅火、火尅金、金尅木、木尅土」という相尅の循環にあたるものであることがわかる。四時、五穀、五気などを五行思想と結びつけ、このオホケツヒメという神と農業との関係を巧みに示している。

このように、『古事記』にも陰陽五行思想など中国思想の影響が存在していることは明らかである。要するに、日中の文化交流ははるかに早い時代から始まったもので、陰陽五行思想などの中国哲学思想も古代日本人に取り入れられ、利用され、日本文化のなかにとけ込んでいたのである。

上述のこの五行思想とかかわるものとして「祝詞」に鎮火祭の記述が見える。この「鎮火」の行動を理論化させたのはこの五行思想である。「鎮火祭(ひしずめのまつり)」は「為除火災」のものであるが、普通「延喜祝詞式」

の「鎮火祭祝詞」にみえる、伊弉冉尊が火の神阿耆突智を生んだ際に火に焼かれたことに起因するといわれている。しかし『日本書紀』の神代巻、さらに『古事記』上巻の五穀起源物語にあたるオホケツヒメ神の物語にはその原型がすでに見られる。『日本書紀』ではイザナミが火の神を生んで亡くなる時、「則生水神罔象女、及土神埴山姫、又生天吉葛」と記述している。この出生の順序は「水尅火、土尅水、木尅土」という五行相尅の原理によるものではなからうか。『日本書紀』のここでの記述は「延喜祝詞式」の「鎮火祭祝詞」にみえる記述とほぼ一致するものであるから、鎮火祭の起源はイザナミ神話にあり、五行思想によって理論化されたと考えられる。火に関する祭りはいろいろ変形してきたにもかかわらず今日でも日本の各地に見られるものである。

記・紀神話は既に陰陽五行という哲学的原理を運用して、合理的に日本の古代神話を作ったり、編成したりしていた事情から、結局神話を基礎とする神道論もこういう中国思想文化との関係で論じなければならない。特に近世以降、儒家神道論が神道論のなかでもっとも主導的地位を取っていたのも理由のあることと考えられる。

しかし、なぜ記・紀神話は陰陽五行思想を取り入れたのか、どんな環境と基礎があったのかなど、さらに日本古代文化の実質を追求する必要がある。論文では主として古代日本の神信仰の実態とかかわりのある樹木信仰を取り上げ、記・紀神話に見える天津神と国津神の分化は在来の焼畑農耕文化と外来の稲作文化との衝突によってできたものではなからうか、またいわゆる天孫降臨神話は稲作伝来の史実によるものであり、この外来のものが徐々に照葉樹林文化に依拠する日本列島の焼畑文化を駆逐し、大和王朝を樹立したのではなからうかと考えたのである。

この稲作文化の伝来ルートは主に朝鮮半島であったろうが、それがまず北九州あたりに広がり、そこで王朝を建て、後に本州方面に

も進行して大和朝廷を建てたのではないかと推測すれば、記・紀神話と魏志倭人伝につながるものと考えられる。そして、稲作文化は太陽信仰を主とするものである故、天照大御神信仰はイザナミ、ワクムスヒ、オホケツヒメ、スサノオなど樹木信仰の神々にとって代わったのではないかと考えられる。さらに稲作文化とともに入った中国思想が王朝の思想理論とされ、天武朝になると、陰陽五行思想で、樹木信仰の神々を五行原理の「木」の一行としてしまい、太陽信仰をとる大和朝廷の信仰理論を確立させ、定着させたと見られる。しかし照葉樹林文化圏にある日本人とその文化の根底には今も依然と大昔から伝わってきた焼畑文化の心理要素が存在しており、しかもそれが日本全域に見られる神社信仰のなかに残り、神木、榊などの樹木信仰は依然として信仰の一部を占めている。これらが日本人の風土的心情を築いた主要素の一つではなかろうかと考えられる。

論文の完成と学位の取得は私にとっては日本思想文化研究の入門コースを終えただけとしかいえない。この基礎をふまえてやるべき

仕事をたくさん抱えているし、とりわけ論文で提起したいくつかの仮説を検討し、解決しなければならない。

在学中の五年間はまことに喜怒哀楽の日々だった。しかし私はこの五年間を感謝しなければならない。指導教官を始め数多くの先生、友人、先輩たちにはぐくまれ、少しずつ成長してきた。同時に私から皆さんにかけての迷惑も一方ならぬものであった。「過去に対する解釈は一切無用。重要なのは現在と将来に向かっていかに行動するかを考えることです」、いつも勉学を励ましてくださった名誉教授の中川徳之助先生はこう言われた。私がかつてよく口にした「道は曲折であるが前途は明るい」という言葉はいまも通用するだろう。「任重くして、道遠し」という中国の知識人に課された課題は大きい。何だか不安であるが、いまだに「中国心」が変わらぬ私は相変わらず屈原子の詩句を口ずさみながら、その一員として我が故国で明るい未来への道を歩いていきたい。

道漫々其修遠兮

吾将上下而求索

皆さん、どうもありがとうございました。

